

ことばと社会とココロの関係

— 異体字選好・共通語化・敬語意識の調査データにもとづく検討 —

横山詔一(国立国語研究所 言語変化研究領域)

これまでやってきたこと

言語行動や言語意識(言語生活)の変化予測モデルを作る

異体字の好みに関する研究

- 異体字ペアを見せて、使いたい方を選択してもらう(異体字選好調査)
- 「会 - 會」のデータからは「桧 - 檜」の結果を予測できない

共通語化や敬語意識の変化に関する経年調査データの解析

- 山形県鶴岡市における共通語化調査(1950年, 1971年, 1991年, 2011年)
- 愛知県岡崎市における敬語・敬語意識調査(1953年, 1972年, 2008年)

異体字ペアを見て
旧字体を選んだ人の割合
(右は256ペアの一部)
同じ人に、同じ調査を半年
後に実施して、一致度をみ
た再テスト法の結果によると、
データの信頼性はかなり高
い(横山・笹原・富山, 2006)

☆ゲシュタルト性
「桧」は「木」+「会」ではない

Pair	旧字体選好 %
亜	2.4
壺	74.1
會	4.7
桧	71.8
觀	0
灌	84.7

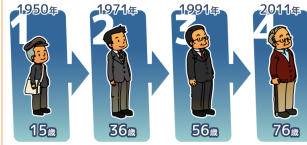
1. 山形県鶴岡市における共通語化調査(1950年, 1971年, 1991年, 2011年: 約60年間の実時間研究)

研究の方法その1:トレンド調査
住民基本台帳からランダムに選ぶ

研究の方法その2:パネル調査
同一人物を長期間追跡する

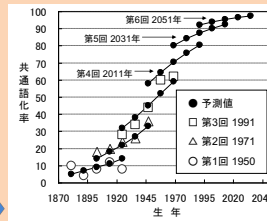


実験をつかむ: 代表性を保証するために必要な方法

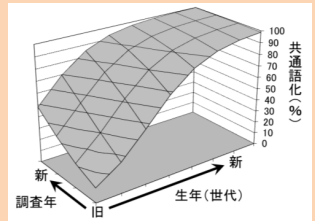


← 調査のデザイン

- 1950年から約20年間隔で経年調査を4回実施。
- 毎回、約400名の話者をランダムサンプリングし、面接調査を実施(トレンド調査)。さらに、トレンド調査を受けた話者を追跡調査(パネル調査)。このようなデザインは**コウホート系列法**と呼ばれる。世界を見渡してもきわめて珍しい。同じデザインの調査は、知能の生涯発達を明らかにする目的で1953年に米国で開始された「**シアトル・プロジェクト**」だけ。

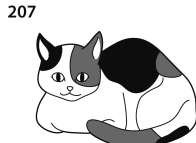


アクセント共通語化の数値予測



多変量S字カーブの例

音韻項目207(ネコ:非語調における力行有声化の有無)



アクセントの変化はどうか? 調査項目の例



経年調査の結果の一部

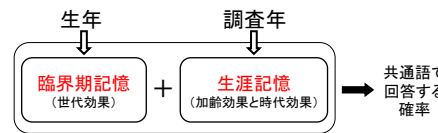
↑ 刺激図の例

- 鶴岡調査で用いられた質問項目は、**音韻・アクセント、語彙、文法**などに関する「言語項目」と、**言語行動と言語意識**を含む「言語生活項目」から成る。
- そのうち、**音韻・アクセントに関する質問で使った刺激図の一部**を上に表示。音韻は31項目、そのうち5項目についてアクセントのデータも記録された。
- なお、「汗」のように図示が容易でないものは「暑いときに背中をダラダラ流れるものはなんですか?」といったナゾナゾ方式で質問した。

☆1回の調査ではなく、経年的に何回も調査する場合

言語の生涯習得モデル(横山・朝日・真田, 2008; 横山・真田, 2010)

$$a_1 \times \text{生年} + a_2 \times \text{調査年} + b \rightarrow \text{共通語で回答する確率}$$



2. 愛知県岡崎市における敬語・敬語意識調査

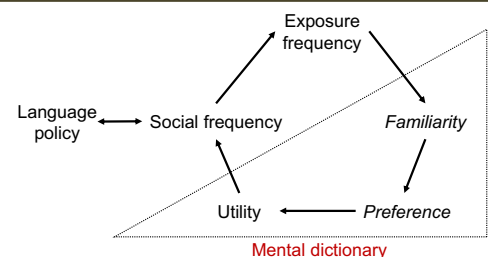
調査で使用された刺激図の一部の例と1953年調査の写真



経年調査の結果の一部(国語研報告書, 1983 など)

- 女性は男性より丁寧。ただし、その差は小さくなりつつある
- 男性の方が場面による使い分けをよくする。女性は場面を通じて丁寧な敬語形式を使い、場面による使い分けが少ない傾向にある
- 加齢に比例する形で、**言語表現の丁寧さが増加したり、言語表現が長くなったり、敬語「～ていただく」を多く使うようになったりする**。これは「**敬語表現の成人後採用**」と呼ばれる現象の一種だと考えられている(井上他2016、井上編2017)

言語生活の円環モデル(言語と社会と心理)



- 『社会言語科学の源流を追う』(シリーズ社会言語科学 2: 社会言語科学会刊行) 横山詔一・杉戸清樹・佐藤和之・米田正人・前田忠彦・阿部貴人(編) ひつじ書房 2018年9月
- 『漢字字体史研究 二: 字体と漢字情報』石塚晴通(監修) 高田智和・馬場基・横山詔一(編) 勉誠出版 2016年11月